

研究拠点形成事業 平成 27 年度 実施計画書

B. アジア・アフリカ学術基盤形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	九州大学
(インドネシア) 拠点機関：	ガジャマダ大学
(タイ) 拠点機関：	チュラロンコン大学
(フィリピン) 拠点機関：	フィリピン大学
(モンゴル) 拠点機関：	モンゴル科学技術大学
(アルジェリア) 拠点機関：	ハウアリブーメディエン科学技術大学
(エジプト) 拠点機関：	エジプト核物質科学研究所

2. 研究交流課題名

(和文)：アジア・アフリカ地球資源コンソーシアム創成と若手資源研究者育成
(交流分野：地球資源工学)

(英文)：New Consortium Creation and Cultivation of Young Scientist on Earth Resources in Asia and Africa Region
(交流分野：Earth Resources Engineering)

研究交流課題に係るホームページ：<http://xrd.mine.kyushu-u.ac.jp/project.html>

3. 採用期間

平成 26 年 4 月 1 日 ~ 平成 29 年 3 月 31 日
(2 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：九州大学

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：総長・久保 千春

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：工学研究院・教授・渡邊公一郎

協力機関：秋田大学、独立行政法人産業技術総合研究所、北海道大学

事務組織：九州大学国際部国際企画課

相手国側実施組織（拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。）

(1) 国名： インドネシア

拠点機関：(英文) Gadjah Mada University

(和文) ガジャマダ大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：(英文)

Department of Geological Engineering,

Associate Professor, Agung HARIJOKO

協力機関：(英文) Padjadjaran University, Institute of Bandung Technology,
Hasanuddin University

(和文) パジャジャラン大学、バンドン工科大学、ハサヌディン大学

(2) 国名：タイ

拠点機関：(英文) Chulalongkorn University

(和文) チュラロンコン大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：(英文)

Department of Mining and Petroleum Engineering,

Associate Professor, Pinyo MEECHUMNA

協力機関：(英文)

(和文)

(3) 国名：フィリピン

拠点機関：(英文) University of the Philippines

(和文) フィリピン大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：(英文)

College of Science, Professor, Carla DIMALANTA

協力機関：(英文)

(和文)

(4) 国名：モンゴル

拠点機関：(英文) Mongolian University, Science and Technology

(和文) モンゴル科技大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：(英文)

School of Geology and Petroleum Engineering, Associate Professor,

Jargalan SEREENEN

協力機関：(英文)

(和文)

(5) 国名：アルジェリア

拠点機関：(英文) University of Science and Technology, Houari Boumediene

(和文) ホウアリブーメディエン科学技術大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文)

Department of Geology, Professor, Omar KOLLI

協力機関：(英文) Anaba University, Mawloud University, Mhamed Bougara University

(和文) アナバ大学、モウルード大学、ムハメドボーガラ大学

(6) 国名：エジプト

拠点機関：(英文) Nuclear Materials Authority

(和文) エジプト核物質科学研究所

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文)

Department of Geology and Exploration, Professor,

Mohammed AHMADY

協力機関：(英文)

(和文)

5. 全期間を通じた研究交流目標

鉱物・エネルギー資源貧国日本が工業先進国であり続けるには、産業の上流となる資源を確保し続ける必要がある。あるいは、資源リサイクルや近年注目されている国内の海洋資源の開発も視野に入れる必要がある。このような地球資源の探査・開発技術、リサイクル技術、さらには資源開発に伴う環境へのインパクトを最小限にする技術は、我が国が世界最先端にある。一方、アジア・アフリカ地域には有望な地球資源がありながらもそれらを探査し、環境に負荷をかけない次世代型の開発技術がない。また、アジア・アフリカ地域の地球資源は、依然、欧米資源企業の搾取の対象となっており、途上国の資源が国造りに活かされていない。このような現状を踏まえ、地球資源が豊かであるが技術がなく、技術者が育っていないアジア・アフリカの途上国と、資源に乏しいが環境低負荷型の資源関連技術を擁する日本が連携すると、両者の将来にわたる安定的な共存関係を強め、ひいてはアジア・アフリカの平和的発展に貢献することが可能となる。本研究交流の第一の目標は、日本を機軸としてアジア・アフリカの研究者と共同で資源開発技術や資源量評価技術の開発を進め、各資源鉱床の成因解明や資源探査技術の向上を図ることである。これらを通して地球資源研究を加速し、情報を共有し、さらに、将来にわたる研究基盤を構築する。

第二の目標は、アジア・アフリカの若手研究者に、グローバルな研究交流の場を与え、また、日本の最新技術に触れる機会を用意することである。さらに、日本の資源分野の若手研究者や学生にアジア・アフリカの研究者と交流する機会を与え、我が国の主力となるグローバル人材として育成することを目指す。

これまでの3年間で、アジア・アフリカ地域の特に、アセアン及び北アフリカ諸国を中心とした鉱物資源分野の研究交流と若手研究育成を実施した。次の3年間は、これまでの実績を生かし、アセアンの新拠点のフィリピン、さらにモンゴルやアフリカ中南部を加え、また、分野も鉱物資源にエネルギー資源も含めた包括的な地球資源を対象として、アジア・アフリカにおける実践的な地球資源コンソーシアム形成を目指す。

6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

研究協力体制の構築の面においては、H23-25年度のアジア・アフリカ学術基盤形成事業の中で構築したネットワークでの研究活動は非常に活発であり、26年度より拠点機関となったフィリピン、モンゴルについては特に重点的に研究の力点を置いて交流を深めていった。これらの点においてははかかなり目標を達せられた。また、新たなネットワークの拡大及び将来的なパートナーシップ構築の面では、本事業の活動の一環及び異なる国際協力事業との連携の中で、北アフリカ以外のアフリカでは、アフリカ中部のルワンダにおけるエネルギー資源に関する研究、アジアでは、東南アジア最後の資源フロンティアであるミャンマーでの鉱物資源に関わる研究交流を積極的に開始した。これら拠点機関のある国+各周辺諸国の研究者を巻き込むような形でのネットワークの発展は着実に進んでいるといえる。

学術的な観点の面では、世界を支える資源国であるアジア・アフリカ諸国との国際共同研究そのものがお互いにとって刺激を与える機会となっているのは確かであり、結果として日本側参加者のフィールド学修の場、アジア・アフリカ諸国にとってはフィールド観察に加えてどのような分析を後にすることを想定したフィールド調査を行えばよいのかを学ぶ場として研究のレベルの引き上げにつながっていると言える。協力研究者として複数の研究者を欧州よりメンバーに加えて、セミナーに招聘することは叶ってはいないが、日程の調整などの問題をクリアできれば、問題ないレベルでの合意はできており、同位体分析、放射年代測定での共同研究はアジア・アフリカ拠点機関を巻き込んで進んでいるという面では実利の目標としては達成できている。アジア・アフリカにおける鉱床モデル及び成因解明の研究が可能な学術研究も開始できており、とりかかりとしては順調であると言える。

若手研究者育成の面においては、将来を担う学部生を含めた日本人学生を積極的にアジア・アフリカ地域での国際フィールド調査に述べ約25人を送り、そこで海外拠点・協力機関の専門家及び現地の若手研究者との国際共同研究の一端を担わせることで、多くの経験を積ませることができた。また、アジア・アフリカの若手研究者には、フィールド調査で得られるデータを最大化するために、どのような意識付けをしながら試料採取すれば、その後どのような展開が想定されるか、そしてそれがどのように資源探査・評価につながるかを実践的に現地指導してきた。その後実際に日本に若手研究者を招いて、実際に分析を日本で行うことで、より彼らがフィールド調査ですべきことが明確になってきたという面では目標を達せられていると言える。

その他の面、学術成果については結果がまとまり次第、随時公表をしていっており、本事業で開催しているセミナー内でもその成果を共有している。ネットワーク内での情報共有はセミナーの場やメーリングリスト等を通じて、頻繁にやり取りを行えているが、ホー

ムページでセミナー以外の活動の周知、特にどこでフィールドワークを行ってきたかといった細かい情報発信については手が回っていないのが実情である。若手世代の交流は日本側拠点に牽引役を置いており、そこを中心として非常に活発に双方向での活動を目指して動いている。

7. 平成27年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

本年度は改めて九州大学が独自に構築してきた地球資源工学分野における九州大学とアジア・アフリカ地域の各拠点・協力機関との間のつながりを確認するとともに、新たにネットワークを構築しているミャンマー、ルワンダに加えてさらにセネガルといった西アフリカにもネットワークの一端を拡大する予定でいる。アジア地域でのネットワークに関しては国際共同研究を推進する研究体制が整いつつあるが、アフリカ地域ではまだまだ文化や国の成り立ちなどの背景の違いから、一筋縄にはいかない現状がある。そこで、他プロジェクトも活用しつつ、本事業での活動・セミナーを通して多くの国・機関との連携のきっかけを得て、将来的にパートナーシップを結ぶことができる礎をさらに拡大させていきたい。

<学術的観点>

資源地質学の研究分野はこれまで欧米を中心として研究が進んできたが、日本の研究レベルもかなり向上している状況である。これらの国が協力して、世界を支える資源国であるアジア・アフリカ諸国の研究のレベルを引き上げることを目指し、日本の拠点・協力機関に加え、協力研究者として複数の研究者を欧州よりメンバーに加えることで、全体の学術レベルの向上、特に同位体・放射年代測定分野での向上を目指す。アジア・アフリカの資源国をフィールド研究の対象とし、我が国と相手国の研究者による共同研究を実施し、これまでに蓄積された資源関連技術や研究に、我が国の持つ鉱床成因モデリングなど新たな視点を加え、そこにさらに協力研究者の協力を仰いでより高いレベルの学術結果を出すことを目指す。本年度の目標はアジア・アフリカにおいて開始した地球資源に関する新たな学術研究を発展させることを目標とし、さらに次年度以降の研究の種を探すこととする。

<若手研究者育成>

地球資源分野のグローバルな人材が日本では特に枯渇しているため、将来を担う学部生を含む日本人学生を積極的に引き続き、アジア・アフリカ地域における国際共同フィールド調査に送り、そこで海外拠点・協力機関の専門家及び現地の若手研究者との国際共同研究の一端を担わせることで、多くの経験を積ませる。そこで得られる地球資源工学的データの蓄積・研究の推進もまた可能な限りアジア・アフリカの現地拠点機関と共同研究とする。また、アジア・アフリカの若手研究者には、地球資源の有効な探査・活用法について日本側の機関との接点を通して学んでもらい、特に欧州からの協力研究者をも巻き込んだどのような資源に対してどのような研究アプローチがあり、どのような分析をすればその資源探査・評価が可能かといった教育を引き続き、実践的に行う。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

学術成果については結果がまとまり次第、随時セミナーでの議論を経て、学会・学術誌で公表をしていくとともに、ホームページでの細かな活動の周知などを行う。地球資源分野のコンソーシアムをいっそう発展させるために、現在、拠点・協力機関になっていない国についても積極的なはたらきかけを行い、特に若手世代では日本側だけではなく、海外拠点にもリーダー候補を置いて、新たな世代の関係構築を行う。

8. 平成27年度研究交流計画状況

8-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成28年度
研究課題名	(和文) インドネシアにおける金・レアメタル資源調査				
	(英文) Investigation of Gold and Rare Metals Deposits in Indonesia				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 米津幸太郎・九州大学・准教授				
	(英文) Kotaro YONEZU・Kyushu University・Associate Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) Agung HARIJOKO, Department of Geological Engineering, Gadjah Mada University, Associate Professor				
参加者数	日本側参加者数		9名		
	(インドネシア)側参加者数		6名		
27年度の 研究交流活動 計画	26年度に開始したスラベシ島の金-銅鉱床の成因に関する研究、ハルマヘラ島の金鉱床のモデル化に関する研究を継続していくとともに、さらに共同でフィールド調査を、特にインドネシアのジャワ島の熱水性の金鉱床、カリマントラン島の希土類鉱徴地あるいはスマトラ島の多金属鉱床を対象にして開始し、鉱床の成因・資源量の基礎的評価を行う。				

27年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	インドネシアにおいて特にテクトニクスが複雑なスラベシ島の金-銅苦笑の調査では、鉱床タイプや鉱化流体の特徴の把握ができるようになり、ハルマヘラ島の金鉱床は世界的にも高品位であることが知られており、そのモデル化を行うことでさらに他地域での同様の金鉱床の探査・開発につながる知見が得られることが期待できる。これらの共同研究を日本・インドネシアの若手研究者を含む共同研究グループにより行い、セミナー、国際学会及び学会誌上に成果を随時公表していくことが期待できる。
---	---

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 26 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) インドシナ半島における金属資源形成の時空間関連性 (英文) Temporal and Spatial Relationship among the Genesis of Metallic Deposit in Indochina Peninsula.				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 渡邊公一郎・九州大学・教授 (英文) Koichiro WATANABE・Kyushu University・Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) Pinyo MEECHUMNA, Department of Mining and Petroleum Engineering, Chulalongkorn University, Associate Professor				
参加者数	日本側参加者数	8 名			
	(タイ) 側参加者数	6 名			
27年度の 研究交流活動 計画	共同でのフィールド調査を行い、昨年度より開始しているタイ中部の金鉱床で行うとともに、その鉱化帯の延長である周辺国の特にミャンマーにおける金鉱床、銅鉱床、スズ-タングステン鉱床の成因と資源量、そして形成年代を明らかにするための研究に着手する。				
27年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	インドシナ半島はタイ、マレーシアのみならず貴金属、卑金属の宝庫である。それに加えて経済発展と開放のめざましいミャンマーは世界が注目する資源保有国である。そこで、これまでのタイ・マレーシアでの金属鉱床の形成の時空間関係を明らかにする研究を隣国のミャンマーへと拡大し、さらなる金属鉱床の時空間的形成のプロセスを把握することができると期待される。これらの共同研究を日本・タイの若手研究者を含む共同研究グループにより行い、セミナー、国際学会及び学会誌上に成果を随時公表していくことが期待できる。				

整理番号	R-3	研究開始年度	平成 26 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) フィリピンにおけるニッケルラテライトに付随する希土類資源調査 (英文) Resource Potential Analysis of Rare Earth Elements Associated with Ni-laterite deposit in Philippines				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 米津幸太郎・九州大学・准教授 (英文) Kotaro YONEZU・Kyushu University・Associate Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職	(英文) Carla DIMALANTA, College of Science, University of the Philippines, Professor				
参加者数	日本側参加者数	5 名			
	(フィリピン) 側参加者数	4 名			
27年度の 研究交流活動 計画	若手研究者を含む日本側とフィリピン側の双方の研究者により研究打ち合わせを行った後に、共同でフィールド調査を行い、主としてノノック島及びディナガット島のニッケルラテライト鉱床の調査を行い、主要元素・微量元素・極微量元素まで定量し、有用金属資源、特に希土類資源・白金族元素の資源量評価と希土類元素の濃集機構の解明に取り組む。				
27年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	ニッケルラテライト鉱床にしばしば伴われる有用金属元素の自然界での挙動に関する知見を得るとともに、その挙動の室内実験及び放射光施設を用いた実験で解明することが期待できる。これらの共同研究を日本・フィリピンの若手研究者を含む共同研究グループにより行い、セミナー、国際学会及び学会誌上に成果を随時公表していくことが期待できる。				

整理番号	R-4	研究開始年度	平成 26 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) モンゴル南部における金資源・希土類資源探査 (英文) Exploration of Gold and Rare Earth Elements Resource in Southern Mongolia				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 中西哲也・九州大学・准教授 (英文) Tetsuya NAKANISHI・Kyushu University・Associate Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職	(英文) Jargalan SEREENEN, School of Geology and Petroleum Engineering, Mongolian University, Science and Technology, Associate Professor,				

参加者数	日本側参加者数	6名
	(モンゴル)側参加者数	1名
27年度の 研究交流活動 計画	昨年度に引き続き、モンゴル南部ゴビ地域に賦存する金鉱床及び希土類鉱床 を対象を絞って、共同でフィールド調査を行い、資源ポテンシャル評価のため の鉱物学的・地球科学的データの採取に努める。	
27年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	金鉱床に関しては、大規模鉱床の周辺に複数の小規模な金の鉱徴地を確認す ることができたため、それら複数の鉱床の相互関係を明らかにすることが期 待される。また、希土類資源鉱床については、希土類元素含有量の調査の結 果、有望とみられる地域を精査し、鉱床生成モデルを作成することが期待で きる。これらの共同研究を日本・モンゴルの若手研究者を含む共同研究グル ープにより行い、セミナー、国際学会及び学会誌上に成果を随時公表してい くことが期待できる。	

整理番号	R-5	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成28年度
研究課題名	(和文) アルジェリアにおけるレアメタル資源調査				
	(英文) Investigation of Rare Metals in Algeria				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 渡邊公一郎・九州大学・教授				
	(英文) Koichiro Watanabe・Kyushu University・Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) Omar KOLLI・Department of Geology, University of Science and Technology Houari Boumediene・Professor				
参加者数	日本側参加者数	5名			
	(アルジェリア)側参加者数	8名			
27年度の 研究交流活動 計画	26年度より引き続き、アルジェリア南部のレアメタルを伴う花崗岩及びレア アースを伴う炭酸塩岩を対象にフィールド調査を行い、それらの化学分析を 通じて、どのようなレアメタル及びレアアースがどの程度、含有されてい るか、また抽出実験によりそれらレアメタル・レアアースがどのような存在形 態をしているのかを明らかにし、資源量評価につなげる。				

27年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	レアメタルを伴う花崗岩の特徴とそのレアメタル含有量をもとに資源量の評価を行うことが期待できる。また、炭酸塩岩に伴われるレアアースは、軽希土類元素に富むが、一部、重希土類元素に富むため、その差異を検討することで、より資源量評価に期待が持てる。これらの共同研究を日本・アルジェリアの若手研究者を含む共同研究グループにより行い、セミナー、国際学会及び学会誌上に成果を随時公表していくことが期待できる。
---	---

整理番号	R-6	研究開始年度	平成 26 年度	研究終了年度	平成 28 年度
研究課題名	(和文) エジプトにおける有用金属資源の探査と再評価 (英文) Exploration and Re-evaluation of valuable metal resource in Egypt				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 米津幸太郎・九州大学・准教授 (英文) Kotaro YONEZU・Kyushu University・Associate Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) Mohammed AHMADY, Department of Geology and Exploration, Nuclear Materials Authority, Professor				
参加者数	日本側参加者数	4 名			
	(エジプト) 側参加者数	5 名			
27年度の 研究交流活動 計画	エジプトの中でも治安に配慮してこれまでのシナイ半島での希土類資源調査は学术论文に専念し、新たに西砂漠地域の金・レアメタル資源の資源量評価に着手する。この地域は地質学的な基礎データに乏しく、27年度はリモートセンシングデータの採取に努め、フィールド調査(今年度あるいは次年度)に備える。				
27年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	資源情報が未開である西砂漠地域の資源量情報の収集と抽出が衛星画像、重力データ、赤外データなどから期待でき、フィールド調査の実施あるいは準備が格段に進むことが期待できる。またシナイ半島の希土類資源のまとめ作業が両国の若手研究者を中心に進捗中であり、その成果公表が大いに期待できる。				

8-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「第5回アジア・アフリカ鉱物資源会議」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “ 5th Asia Africa Mineral Resources Conference “
開催期間	平成 27 年 7 月 27 日 ～ 平成 27 年 7 月 31 日 (5 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) フィリピン・マニラ・フィリピン大学 (英文) University of the Philippines, Manila, Philippines
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 米津幸太郎・九州大学・准教授 (英文) Kotaro Yonezu・Kyushu University・Associate Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Carla DIMALANTA, College of Science, University of the Philippines, Professor

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (フィリピン)	
		A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	10/	60
	B.	12	
インドネシア 〈人／人日〉	A.	6/	36
	B.	1	
タイ 〈人／人日〉	A.	6/	36
	B.	1	
フィリピン 〈人／人日〉	A.	4/	24
	B.	20	
モンゴル 〈人／人日〉	A.	1/	6
	B.		
アルジェリア 〈人／人日〉	A.	5/	48
	B.	4	
エジプト 〈人／人日〉	A.	5/	30
	B.		
合計 〈人／人日〉	A.	37/	240
	B.	38	

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>日本及び海外拠点機関の貴金属・レアメタル資源を含む鉱物資源の開発・探査の現状とこれまでの研究成果あるいはこれからの研究計画についての発表と忌憚のない議論を通じて、情報の共有化を図る。本年度は本事業化で行われている共同研究の成果は勿論のこと、各自が行っている鉱物資源・エネルギー資源に関する研究成果を発表する。口頭とポスターの2セッションを用意し、若手の登壇の機会を多くするとともに民間鉱山会社からの基調講演を準備し、産学の連携の場とする。また、会議に引き続きフィリピン北部の熱水性金・銅鉱床、及び希土類資源を含む重鉱物の濃集している沿岸部を中心に訪問する地質巡検を通して、さらなる知識交換や研究者交流を図り、ネットワークの深化と拡大に努める。特に若手研究者には前述の積極的な会議での発表と地質巡検の企画・運営を実行してもらいながら、交流と経験を深める場とする。</p>
<p>期待される成果</p>	<p>日本側拠点機関と相手国拠点側のネットワークは確固たるものになりつつあるものの、実際に顔を合わせての協議、公開の場での成果発表は非常に重要な機会であり、多くの意見を得られる場としても貴重な場である。また、新たな機関、新たな若手研究者との出会いの場としての機能や若手研究者同士の交流、刺激の場となることが期待できる。これまでにアジア・アフリカ諸国の研究者を日本へと招くという活動は多く試みてきたが、アフリカ諸国の研究者をアジアへと招くことは多くない機会でもあり、また今後のそういった動きを自発的に促す意味でも良いきっかけとなることが期待できる。地質巡検ではアジア地域にしばしば見られる比較的若い鉱床形成年代を持つ熱水性鉱床を予定しており、アフリカの研究者にとっては非常に興味をひくとともに、より知識を深め、新たな知見につながると期待できる。</p>
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>日本側責任者：米津幸太郎（九州大学・准教授） フィリピン側責任者：Carla DIMALANTA（フィリピン大・教授） 事務局長（国際）：Jillian GABO（九州大学・学術研究員） 事務局長（フィリピン）：Betchaida PAYOT（フィリピン大・助教） 運営委員会メンバー：大竹翼（北海道大学・准教授）、高橋亮平（秋田大学・助教）、中西哲也（九州大学・准教授）、Thomas Tindell（九州大学・助教）、フィリピン大学・地質学科教員 協力メンバー：九州大学大学院地球資源システム工学専攻並びにフィリピン大学、若手研究者（大学院生含む）</p>

開催経費 分担内容 と概算額	日本側	内容 外国旅費 謝金 消耗品等 その他（会議・巡検） 外国旅費等消費税
	（フィリピン）側	内容 会議・巡検費 国内旅費

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

平成 27 年度は実施しない

8-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

該当なし

9. 平成27年度研究交流計画総人数・人日数

9-1 相手国との交流計画

派遣 派遣元	日本 〈人/人日〉	インドネシア 〈人/人日〉	タイ 〈人/人日〉	フィリピン 〈人/人日〉	モンゴル 〈人/人日〉	アルジェリア 〈人/人日〉	エジプト 〈人/人日〉	合計 〈人/人日〉
日本 〈人/人日〉		2/14 (7/56)	1/6 (2/14)	15/90 (7/42)	1/8 (3/24)	0/0 (1/10)	1/8 (1/8)	20/126 (21/154)
インドネシア 〈人/人日〉	1/10 (5/45)		0/0 (0/0)	6/36 (1/5)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	7/46 (6/50)
タイ 〈人/人日〉	0/0 (2/10)	0/0 (0/0)		6/36 (1/5)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	6/36 (3/15)
フィリピン 〈人/人日〉	2/10 (5/35)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/10 (5/35)
モンゴル 〈人/人日〉	0/0 (1/10)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/6 (0/0)		0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	1/6 (1/10)
アルジェリア 〈人/人日〉	0/0 (2/20)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	5/48 (4/24)	0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	5/48 (6/44)
エジプト 〈人/人日〉	0/0 (2/15)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	5/30 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)		5/30 (2/15)
合計 〈人/人日〉	3/20 (17/135)	2/14 (7/56)	1/6 (2/14)	38/246 (13/76)	1/8 (3/24)	0/0 (1/10)	1/8 (1/8)	46/302 (44/323)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

9-2 国内での交流計画

0/0 (人/人日)

10. 平成27年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	240,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	5,420,000	
	謝金	160,000	
	備品・消耗品 購入費	120,000	
	その他の経費	590,000	
	外国旅費・謝 金等に係る消 費税	270,000	
	計	6,800,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		680,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合 計		7,480,000	